

# 研究活動の継続と深化

大正大学学長 勝 崎 裕 彦

「学生中心の大正大学」の旗標を高く広く掲げて、そのことを正しく確実に実現するために「教職協同の大正大学」を繰り返して唱えている。さらに地域連携を含めた社会貢献への取り組みの中で、「地域と共に歩む大正大学」がもう一つの大切な目標である。

現在、大正大学の教員は、職員と一致協力して、学生指導を中心とした教育の充実のために努力しながら、さらに諸種の学事・学務の運営や事務処理、地域や社会との協力・協調によるさまざまな活動の実践などに、常日頃追いまくられるように挺身中である。まことに、先生方の諸事諸般のご尽力に対して、感謝にたえないところである。

そうした中で、大学教員はまたそれぞれの学問領域を担うすぐれた研究者でもある。研究活動の継続と深化をはかって、各自が鋭意精進努力することも当然の責務なのである。現に各教員のたゆみない研鑽の成果は、年々際々の研究発表や研究報告、さらには研究論文や研究書の公表・公刊によって、蘊奥の宝庫のごとく積み重ねられ、積み上げられている。

大正大学においては、そのような各教員の研究成果を発表するためのもっとも主要な機関誌として『大正大学研究紀要』がある。大正大学九十年の伝統の中で、記念号を含めて第100輯を数えることになったのは、歴代の教員の

研究実績の賜物であり、蓄積された研究内容の広がりと深さに、はるかに敬意を表したい。『大正大学研究紀要』全100冊は、まさに大正大学の学問の集大成であり、大正大学の研究業績の金字塔である。

ここに、『大正大学研究紀要』の各冊を手にとってみると、まずは戦前あるいは戦後の時代の各輯における執筆陣の豪華さに目を奪われてしまう。いずれもそれぞれの学界を先導した泰斗であり、そうした一流の大家に対して、研究紀要を通して改めてはるかに敬慕することである。

大判のB5判一段組みの体裁になってからは、その誌面の重みと、時に分厚い紀要に接して、まさしく『大正大学研究紀要』のひとときな重厚さに、若き院生時代や研究員時代には殊更に憧れたものである。「いつか研究紀要に論文を書いてみたいなあ」という思いは、私自身、焦がれる心でいちずに願っていたことでもある。

私はこれまで、拙いながら四編の論文を研究紀要に掲載していただいた。はじめて執筆させていただいた折には、紀要を手にとって、感動のあまり涙が出るような思いであったことを覚えている。また抜刷を送っていただいた時の感激も忘れられない。そして、もっと忘れられなくて心に残っていることは、誌面を開いてはじめて目に飛び込んできた校正ミスのことである。校正ミスは、手ぬかりや遺漏の多い私には、恥ずかしいけれどもいつものことではあったが、その時の面目のなさや後悔はたいへんに大きなものであった。それはきつと、『大正大学研究紀要』の歴史の重みに対する私の申し訳なさ、済まないという思いであつたろう。研究内容のことはさておいて、研究紀要に対して、本当に心から謝罪したのである。

さて『大正大学研究紀要』は、現在は雑誌形態の紀要ではなくして、大正大学機関リポジトリによる発表形態となっている。インターネット社会になって、研究論文の執筆方法も大きく変わり、大正大学においても新しい時代の新しい研究者を輩出している。

大正大学のさらなる展開も、平成二十八年度の大学創立九十周年を目前にして、すでに従来の四学部編成から地域創生学部を新たに開設して、五学部体制へと盛り上がることになる。当然のことながら、大正大学の教育を主導する

教員も増え、大正大学の学問を支える研究もより広汎なものに、より豊富なものになることであろう。そのすぐれた研究成果を発表する中心を担うのが、まさに『大正大学研究紀要』である。大正大学の学問の広がりと深さを象徴するような、研究紀要のますますの充実した継続を心から願うのである。